

のほほん

神保外子 埼玉

焼肉店再開すると店頭に「スタッフ募集」の幟はためく
胴吹きの新芽びつしり身にまどふ並木の銀杏こそばゆからん
移りきて二十七年近所から豆腐屋、八百屋、貸本屋消ゆ
大木の樗の幹にとりつけるサルノコシカケ古木を倒す
のはやさしのどかほのほののんびりと
のんきのびのびのほほん

「つぶくろ」

尾崎潤子 千葉

QRコードに似てる鬱の文字みればスマホをかざしたくなる
こころ病む子の座りゐる一か所がつねにさみしき日暮れのごとし
ウクライナ民話「つぶくろ」二人子と読みし日のありとほい冬の夜
結局のところなんにも変らない争ふことをやめぬにんげん
はなびらが散るとめどなく散る夜のさくらは泣いてゐるやうに見ゆ

をとめ

佐藤 玄 神奈川

三月のひかりに子らは巢立ちゆく桜のつぼみいまだかたき日
先んじて花ひらきたる緋の色さくらにスマホをかざす娘ら
青銅のをとめは見詰む肌柔きをとめら園の花に集ふを
街路樹にひとと交じる山桜きよきましろの光をはなつ
いつの日の歌会か掃部山かもんやまの花愛でて詠み合ひたのしかりしは

寒鯉のねむり

岩崎 佑太 東京

三匹の寒鯉のねむりねむりをり九十の祖父母三十のわれ
「幸せな百年人生」うたひをる保険のキャッチコピーおそろし
三年目の介護生活投げ出して帰り道なき旅してみたし
朝夕の介護のあひまおもひ出すパブロ・ピカソの引つ越しの数
介護者のわれの悪意を問ひただすふくろふのごとし動かぬ祖母は

雲の渚

小島 静子 東京

しののめといふよき言葉思ひつつ東の空の明るむを待つ
わたくしは片肺飛行 春寒の朝の空気を口あけて吸ふ
雲、雲、雲 雲の海にも渚あり雲の渚に青空が透く
現金は持てぬ施設の自販機に紅茶買ひたし110円欲し
嘶なら草木も眠る丑三つ刻ヘルパーさんがひそひそ通る

わたしが余る

真島 陽子*新潟

ロシアからそば粉、小麦粉届かねば絶滅危惧種か緑のたぬき
くしゃくしゃに疲れて眠る丸太ん棒 月のひかりに気づきもせず
買い置き菓子袋が見当たらず夫の焼酎また減っている
誰もせぬタオル洗いは誰も来ぬ朝の職場のわたしのあそび
三人という関係の難しさ割り切れなくてわたしが余る

崖上の桜

三浦陽子 長野

ガムテープをちぎりて西日濃き窓のカメムシの黒に近づいてゆく
満開の桜あかりに濡れながら花の歌多き歌会にゆく
崖上の桜の花が散りしきる白昼葬儀屋のセールスは来ぬ
夕ぐれの桜の太根かどねの黒ぐろと太田靴店に灯りともれり
崖上の五本の桜の花びらが真横に吹雪く無言を聴きぬ

妻退院す

鷺巣錦司 静岡

鉄幹をしぼるごとくに紅梅は今年を咲けり 妻退院す
一歩づつ廊下の手すりを伝ひ来る妻を見守まもりけふは退院
もう帰れないかと思ひし日のありと退院の妻梅の花見る
病院食を解かれし妻が手をのぼす家族一つの鮎桶の寿司
どう見ても金魚に見えて訊ねれば楊貴妃といふメダカなりとぞ

娘の角煮

山田恵里 愛知

青空が白木蓮の卵抱き離れ住む子の婚の日来たる
「十八年」私のそばにゐた娘「たつた」と付けたり外してみたり
マーマイドドレスの裾を長く引く吾子か光か扉にあふる
新郎は新婦の角煮が好きと言ふ 母の知らない娘の角煮
すずやかに戸籍を抜けてもうゐない私の髪をいぢつて寝る子

こゑのゆくへ

有川 知津子 福岡

梵鐘を祖母とあふぎし日のありき観世音寺の春のまひるを
叶はざる恋はいくつもあるものを鬼怒川沿ひの露草の花
光から風から鐘はかくされて博物館のうすやみのなか
梵鐘のかそけき音の遠白く長塚節歩み去りたり
塔の上の嘴太鴉のぞきをりみづから零すこゑのゆくへを

キャリーバッグS

中村 仁彦 福岡

最後にはプーチンとなるマトリョーシカ赤の広場で求めしを捨つ
解かれたるビルの跡地にビルが伸び小さくなりゆく天神の空
春色のコート靡かせをみながら軽やかにひくキャリーバッグS
毛づくろひする野良猫の無防備をゆつたり見をり春の硝子戸
おとなしき新入生の男の孫へ贈る花束ひまはりの色

鍵の数

新田 節子*宮崎

公園で束ねし鍵を拾いたり鍵の数ほど顔もつ人の
軒下へツバメはツバメの勢いで春連れきたりああ目がまわる
早苗田のあぜ道をきて目に見えぬカエルの声に包囲されたり
野海棠の花に会いたるこの朝は虹のようなる息しておらん
染められし脳の切片せつぺん見ることはなくて通草あけびの花を見ており